

1月1日 神の母聖マリア

民 6:22～27 ガラ 4:4～7 ルカ 2:16～21

1. ルカ

v.20「羊飼いたちは、見聞きしたことがすべて天使の話したとおりだったので、神をあがめ、賛美しながら帰って行った。」

クリスマスに子供たちが演じる聖劇では、“主の天使が 2:8-12 の場面で言ったことは、本当でした”という結論で、お話が終わってしまいます。しかし私たちは、歴史の教会がこれまで決して説明し尽くすことの出来なかった、「神秘としての神の知恵」(I コリ 2:7)、御子の受肉という出来事を、マリアと共に思い巡らすようにと招かれているのではないのでしょうか。v.20 は 1:37 の天使の言葉と共に、それが徹頭徹尾“神の御業”であったことを告げています。

イエスがお尋ねになった「あなたたちはメシアのことをどう思うか。だれの子だろうか」(マタ 22:42) という問いを、多くのキリスト信者は真面目には考えてみたことがありません。先週の学びで言及した“まことの神にしてまことの人”というカルケドン信条の定式を、古代教会の単なる理屈であると軽視して、自分ではそれと知らずに異端的な理解や説明をしていることが多いのです。以下に、この信条の中心部分を紹介しておきましょう。

“我々はただ一人の御子我らの主イエス・キリスト……を信ず。主は神性において全く、人性において全く、まことの神にしてまことの人、……神性によればよろず世の前に父より生まれ、人性によればこの終わりの時代に我らのため、また我らの救いのために神の母(θεοτόκος)なる処女マリアより生まれたり。この唯一のキリスト、御子、主、独り子は、二つの性において混じることなく、変わることもなく、分けられることも出来ず、離すことも出来ぬ御方として認められねばならぬ。合一によって両性の区別が取り除かれるのではなく、かえって、各々の性の特徴は救われ、一つの人格一つの本質に共に入り、二つの人格に分かたれ割かれることなく、ただ一人の御子、独り子、言なる神、主イエス・キリストである。”

このカトリック教会の古典的信条は、キリストの神人両性を等しく強調する立場を守って、どちらか一方を強調して他方を退ける異端に対抗したのです。それは私たちがキリストの受肉の出来事を理解する場合の“原則”であって、すべてのキリスト者は決してこの原則に無知なままで、御子についても、神の母聖マリアについても語るべきではありません。

私たちはマリアと共に、“(神の御業の)出来事をすべて心に納めて、思い巡らす”ことを学びましょう。

2. ガラ

羊飼いたちが探し当てた「飼い葉桶に寝かせてある乳飲み子」が、「律法の支配下にある者を贖い出し

て、わたしたちを神の子となさるため」(v.5)に、「神は、その御子を女から、しかも律法の下に生まれた者としてお遣わしになった」(v.4)ということであったと、使徒たちが理解したのは、主が復活された後のことでした。新約聖書から、そして福音書の降誕の物語りから、現代の私たちはこの使徒たちの宣教を聞いているのです。その宣教は“福音の宣教”であって、「神がわたしたちを愛して、わたしたちの罪を償ういけにえとして、御子をお遣わしになりました」(Iヨハ4:10)という知らせです。

私たちの共にささげるミサで、“ことばの典礼”と“感謝の典礼”を通して私たちに会ってくださるキリストは、すでに復活して神の右の座に着いておられる天上のキリストであることを、いささかも曖昧にすることがないように気をつけましょう。「イエス・キリストが肉となって来られたということを公に言い表す霊は、すべて神から出たものです。」(Iヨハ4:2) 教会は降誕節によって、この“神の愛の出来事”(Iヨハ4:10)を記念しているのです。

3. 民

v.27 「彼らがわたしの名をイスラエルの人々の上に置くとき、わたしは彼らを祝福するであろう。」

「彼ら」とは、“アロンとその子ら”(v.23) のことで、代々の大祭司を指しています。大祭司の栄誉ある職の明確な定義は、捕囚期後の文書によればダビデ家の王と並び「二人の油注がれた人たち」(ハガ1:1, 2:4、ゼカ4:14)であり、神殿における務めは大祭司だけが“司る”(ゼカ3:6-7/フランシスコ会訳)のです。「また、この光栄ある任務を、だれも自分で得るのではなく、アロンもそうであったように、神から召されて受けるのです。同じようにキリストも、大祭司となる栄誉をご自分で得たのではなく、……」(ヘブ5:4-5)。

マリアは、この大祭司である「神の子の母となる最高の役割と尊厳を授けられた」(教会憲章53)「恵まれた方」(ルカ1:28)として、私たちの間に立っておられます。そしてこの神の子である大祭司キリストは、既に「御自身の血によって、ただ一度(天の)聖所に入って永遠の贖いを成し遂げられ」(ヘブ9:12)て、教会が共にささげるミサを通して私たちに会ってくださるのです。これは信仰の神秘です。

「主の死を思い、復活をたたえよう、主が来られるまで。」 アーメン、ハレルヤ。

1月8日 主の公現

イザ 60:1~6 エフェ 3:2~6 マタ 2:1~12

1. マタ

v.7-8 「そこで、ヘロデは占星術の学者たちをひそかに呼び寄せ、星の現れた時期を確かめた。そして、“行って、その子のことを詳しく調べ、見つかったら知らせてくれ。わたしも行って拝もう”と言ってベツレヘムへ送り出した。」

第二バチカン公会議の典礼憲章に受け入れられた「過越の秘義」という神学概念は、今日のカトリック信者にとっては既に馴染み深いものになっています。「主キリストは、……この秘義によって“われわれの死を死によって打ちこわし、生命を復活によって回復した”」(典礼憲章 5)や、「十字架上のいけにえの、ミサにおけるその秘跡的再現」(ミサ典礼書の総則 前文 2)という説明を、私たちはごく自然に受け入れています。

しかし、この“秘義”と呼ばれるキリスト教独自の教理は、それが本質的にはパラドクス(paradox)であることを指摘したいと思います。パラドクスとは単純には“説明のつかないこと”を意味しています。つまり、聖伝と聖書に伝えられている事柄を、人間の宗教心に訴えるような、あたかもよく分かった話のように説明してしまうと、その本来の神学的な意味が見失われてしまうのです。

ヘロデ王はメシアの誕生という噂を、決してパラドクスとしてではなく、“説明のつくこと”、つまり“王の権力によって処理可能な事柄”であると考えて、そのための情報収集を始めたのです。しかし、神がそれを妨げられました。

v.12 「ところが、“ヘロデのところへ帰るな”と夢でお告げがあったので、別の道を通して自分たちの国へ帰って行った。」

近代の我が国のキリスト教では、東方の学者たちの来訪という主の公現の祭日の物語りは、だれにも“おとぎ話”としてしか受け取られませんでした。おとぎ話としてなら“よく分かる”からです。しかしそのことによって、「どうしてそんなことがありえましょうか」「神にできないことは何一つない」(ルカ 1:34,37)という“秘義”が、忘れられてしまいました。

私たちは今朝、ミサの福音書の朗読を通して、神の御業の喜ばしい知らせ(v.10、ルカ 1:19, 2:10)を聞いているのです。

2. エフェ

過去半世紀ほどの我が国のキリスト教を振り返ってみて、……それが私個人の乏しい情報収集力のせいであればよいのですが……、司祭や牧師が“神の秘められた計画”について説教するのを聞くことが、全くありませんでした。本来はイスラエルのものであった神の約束と計画(ロマ 9:4-5)を、私たち“異邦

人が福音によってキリスト・イエスにおいて、ユダヤ人と一緒に受け継ぐ”という秘義(μυστήριον 秘められた計画)を、自ら聖書に親しむ例外的少数者のそのまた一部の自覚的な信者たちしか、知っていなかった!とはなんと不思議なことでしょう。

しかしカトリック教会と、同じく典礼暦を用いているその他のキリスト教会とでは、今年も主の公現の祭日が守られ、この主日に配分された聖書の朗読を会衆は確かに聞いていることを、感謝しましょう。実に私たちの共にささげるミサそのものが“秘義”であり、その中のことばの典礼を用いて神御自身が“秘められた計画”を、今年も私たちに知らせてくださるのです。そして神は、説教をする司祭や牧師が、「秘められた計画が、どのように実現されるのかを、すべての人々に解き明かす」(3:9)ことを求めておられます。

3. イザ

ミサの朗読用テキストでは、今朝のイザヤ書の朗読の冒頭に [エルサレムよ、]と補われていて、私たちがこの朗読において将来実現する“天上の典礼を前もって味わい、これに参加”(典礼憲章 8)していることを、明示しようとしています。

w.2-3 「見よ、闇は地を覆い、暗黒が国々を包んでいる。しかし、あなたの上には主が輝き出で、主の栄光があなたの上に現れる。国々はあなたを照らす光に向かい、王たちは射出するその輝きに向かって歩む。」

それは、徹頭徹尾“説明のつかないこと”であって、信じる人々が「忍耐して待ち望む」(ロマ 8:25)こと、パラドクスとしての“秘義”であることを、教会は今年も降誕節の最後の主日に祝って感謝するのです。

アーメン、ハレルヤ。

1月15日 年間第2主日

サム上 3:3～10,19 Iコリ 6:13c～20 ヨハ 1:35～42

1. ヨハ

最初の弟子たちを取り上げている福音書のテキストから、私たちは今週はヨハネの、来週はマルコの記事を学ぶこととなります。聖書の中の四つの福音書はすべて、イエスの単純な歴史ではなくて、“復活の光によって書き直された歴史”ではありますが、ヨハネ福音書は共観福音書(マタイ、マルコ、ルカ)に較べて特に、きわだって強くこの性格を顕示しています。そこに登場するイエスは、復活したキリストであり、御自分の体である教会の頭となられた主であるという、教会の信仰によるいわば当然の歴史解釈が、ヨハネ福音書を理解する場合の大切な鍵となります。

vv.35-36 「ヨハネは、……歩いておられるイエスを見つめて、“見よ、神の小羊だ”と言った。」

私たちはこのヨハネの証しを、まるで初めて聞くようにはなく、“既にその血によって贖われ、罪を赦された民”として聞いているのです。そして私たちがこのイエスに従って行こうとするとき、イエスは「来なさい。そうすれば分かる」(v.39)と招いてくださるのです。人は望みさえすれば、存分にキリストの福音を学ぶことが出来るということです。それは「難しすぎるものでもなく、遠く及ばぬものでもない。」(申 30:11、ロマ 10:6-8)

共にミサをささげている会衆は、今朝この福音の朗読から、「わたしたちはメシア(油を注がれた者)に出会った」(v.41)というアンデレの言葉を、心からの喜びをもって聞きましょう。そうです。私たちは“ことばの典礼”と“感謝の典礼”を通して、罪と死に勝利された復活のキリストにお会いしているのですから。

そして確かにキリストの教会は、すでにペトロを土台岩として(v.42)建てられています。代々の時代のキリスト者はこの教会を通して、キリストの福音の“満ちあふれる豊かさの中から、恵みの上に、更に恵みを”(1:16)受けて来ました。

2. Iコリ

この教会は、主における聖なる神殿であり、霊の働きによる神の住まいであると(エフェ 2:21-22)、初代教会の指導者は信徒に熱心に教えたようです。

v.19 「知らないのですか。あなたがたの体は、神からいただいた聖霊が宿ってくださる神殿であり、……」

この「知らないのですか」とは、信者がわきまえているべき最も基本的な事柄を提示する句で(ロマ 6:3 参照)、昔のカトリック教会で洗礼志願者が当然理解し、暗記しなければならなかった公教要理の条項のようなものを指しています。現代流に言えば、それはもっとも基本的な信仰の常識であって、こんなことも分かっていない人は“キリスト者の資格なし”ということになります。

1コリ3:16でも、「あなたがたは、自分が神の神殿であり、神の霊が自分たちの内に住んでいることを知らないのですか」となっているように、この神殿は「あなたがた」という“共にミサをささげる共同体”を指していて、切り離された個人一人一人のことではありません。この共同体性を理解することは、現代人にとっては特に大切であるように思われます。

なぜなら今日の世間の常識では、まず個人一人一人の信仰があって、同じ信仰の仲間が集まって教会という宗教団体が成立すると考えられているからです。それで、“伝道”とか“教会造り”ということが、世間の起業の場合と同じように“教会経営”という発想で進められ、それに“成功したとかしなかったとか”という形で評価されるのです。多くのプロテスタント教会がすでにそうであり、多かれ少なかれカトリック教会でも似た傾向が見られます。

しかし、教会は主における聖なる神殿であり、信者はその部分(12:27)であって、いわば一人一人は聖霊が宿っておられる教会の縮図(microcosm)、幹に対する枝(ヨハ 15:1-6)のようなものなのです。教会につながっていないければ、「外に投げ捨てられて枯れる」(ヨハ 15:6)ことになります。枯れ枝をいくらたくさん集めても、それで教会が出来る訳ではありません。

3. サム上

私たちが教会を、“経営し運営される組織”として考えるか、それとも“聖霊が宿ってくださる神殿”と理解するかによって、主の言葉が示されず(v.7)、神のことが聞こえないことにもなり(3:1)、あるいは主がお呼びになる声をミサを通し、聖書を通して聞くことにもなります。

v.10 「どうぞお話しください。僕は聞いております。」

v.19 「サムエルは成長していった。主は彼と共におられ、……」

アーメン、ハレルヤ。

1月22日 年間第3主日

ヨナ 3:1～5,10 | コリ 7:29～31 | マコ 1:14～20

1. マコ

v.14-15 「ヨハネが捕らえられた後、イエスはガリラヤへ行き、神の福音を宣へ伝えて、“時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい。”と言われた。」

先週の学びで、福音書はすべてイエスの単純な歴史ではなくて、“復活の光によって書き直された歴史”であると述べました。単純な人はこのイエスの“宣教の第一声”を、紀元30年頃のガリラヤ伝道における独特の使信に過ぎず、初代教会誕生後の使徒たちによる宣教は、もっと実生活にフィットする倫理的で建徳的な、別種の教えであったと考えがちです。なぜなら主日のミサで語られる司祭の説教は、イエスが語ったようにではなく、いつももっと实际的で、今の時代が求める“癒やし”に答えることを主眼にしているからです。

真面目に聖書を通読する人は、福音の終末的使信がイエスの時代だけのものではなくて、まさに使徒たちの宣教の中心的主題であった、……つまりこの“イエスの宣教の第一声”はそのまま使徒の時代の宣教そのものであったことを知って驚くのです。“からだの復活と永遠の命を信じます”という神の国の希望は、教会の宣教と教えの付録のようなものではなくて、その骨格をなす中心的な主題であります。

聖書だけでなく、聖伝も同様であることを、私たちが普段使っている“ミサ式次第 会衆用”を改めて読んでみれば、容易に理解することが出来ます。

v.17 「イエスは、“わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしよう”と言われた。」

事実、原始教会における使徒たちは、キリストの福音によって人々を救いに導き、教会に集める漁師でありました。それは彼らが最初にイエスの弟子になったときから持っていた知識や能力によってではなくて、主が死者の中から復活した後になって初めて理解した福音によってでありました。

現代のキリスト者は、聖伝と聖書からキリストの福音を学ぶことを省略して、ただの善意や愛の精神で自分が“人間をとる漁師”になれると勘違いしてはなりません。従来多くの社会活動や救援事業が、“キリスト教精神で”とか“福音を实践する”などという美辞で飾られて来ました。しかし、それらに従事するキリスト教信者はほとんど全く、使徒たちから伝えられた福音については何も知っていなかったのです。原始教会で宣教した使徒たちは“決してそうではなかった!”という事実を前提にして、私たちはこのv.17の意味を理解しましょう。

2. コリ

v.31 「この世の有様は過ぎ去るからです。」

非常に重要な、しかしその健全な理解が必ずしも容易でない、福音の中心的な主題とも言えるこの言葉は、普通の(穏健な = 生ぬるい)教会ではこれまで殆ど無視されて来ました。そして逆に、偏狭な、原理主

義的な教会では、過激で不健全な解釈が強調されるのが常でした。いずれの場合にも、その原因は信者が“自分で聖書を学ぶ”ということに怠慢であったということです。

「時は満ち、神の国は近づいた」(マコ1:15)から「定められた時は迫っています」(v.29)「この世の有様は過ぎ去るからです」(v.31)まで、それは聖書全体の中で理解し聞かれなければならない主題であって、これだけを切り離して独自の“大予言”のように説く狂信的なセクトは、“怪しげな宗教”です。大切なことは、この主題が“キリストの福音の重要な要素”だということです。もし私たちがこの主題を正しく受け入れることが出来なければ、それはキリストの福音そのものが理解出来ていないということなのです。

愛するカトリックの子らが、一人でも多く“熱心な聖書の学習者”になってくださることを、私は期待しています。どうか多くの“(聖書やキリスト教に関する)解説書”は後回しにして、先ず“聖書の素読”に励んでいただきたい。聖書は“あるがままに”“その全体を通して”読むことが一番であって、それこそが最高の“聖書の学習”なのですから。

ここで一つ言及しておく、カトリック信者から見てプロテスタントの人たちは“よく聖書を知っている”かのように思われていますが、いえ、いえ、彼らも殆ど自分では“聖書の素読”などしていません。彼らはただ“教えられた特定の聖句”だけを使って、それぞれの教派的主張を妄信的に宣べているだけのことです。

3. ヨナ

v.5 「すると、ニネベの人々は神を信じ、断食を呼びかけ、身分の高い者も低い者も身に粗布をまとった。」

ヨナによって宣教される神のことばに、直ちに反応した人々がいたということに、私たちはショックを感じるべきではありませんか。これをどこか遠くの国での昔の話として読み過ごす人は、神のことばに冷淡な人です。聖書を読んでも神のことばを聞き取れない人とは、そういう人のことです。

私たち各自は今年こそ、聖書を通して、自らキリストの福音を聞こうではありませんか。カトリック教会では昨年は“フランシスコ会訳の聖書合本”が発売されました。今年10月11日からは、教皇の自発教令によって一年間の“信仰年”が始まります。私たち一人一人が本当に福音を聞き、これに応答する信仰を「再発見し、深め、あかしする」(自発教令／教皇庁教理省覚え書き)ようにと、神が！期待しておられるのですから。 アーメン、ハレルヤ。

1月29日 年間第4主日

申 18:15～20 | コリ 7:32～35 マコ 1:21～28

1. マコ

v.22 「律法学者のようにではなく、権威ある者としてお教えになった……」

v.27 「…… 権威ある新しい教えだ。」

イエス・キリストは、律法がユダヤ教において果たしていた役割に代わって、「権威ある新しい教え」として登場されました。太古の創造の日に輝き出た光(創 1:3)は、今やキリストの御顔に輝いて(II コリ 4:6)、永遠の命と神の国への復活を約束する救いの福音の宣教となって現れました。

ミサの“ことばの典礼”で聖書が朗読され、司祭(または司教)が説教するとき、それが会衆にキリストの福音を伝えるものであることによって、権威を持つこととなります。“キリストは自身のことばのうちに現存している。聖書が教会で読まれるとき、キリスト自身が語るのである。”(典礼憲章 7) そして説教者の務めはただ一つ、神の子イエス・キリストの福音(1:1)を公式に宣べることであります。決して律法学者のように聖書の記述を延々と法的に解釈すること(マコ 10:2, 12:14)でも、あるいは魔術を使って人々の心を奪うこと(使 8:9-11)でもありません。

v.27 「…… この人が汚れた霊に命じると、その言うことを聴く。」

原始教会の使徒たちは、主から悪霊を追い出す権能を与えられていました(3:15)。現代においても福音が正しく語られるところでは、悪霊が退けられます。しかしそれは説教者の魔術によってではなくて、みことばを通して働かれる神御自身の御業なのです(6:13)。

2.

ミサ典礼書の総則 95には次のように書かれています。「司祭は朗読台で福音書を開き、“主は皆さんとともに”と唱える。それから“(マルコ)による福音”と唱え、親指で福音書と自分の額、口、胸に十字架のしるしをする。」ただし、“これは司祭の動作であって会衆の動作ではない”と、ユンクマンが解説しているものです(ミサ p.215)。そして更に続けて括弧書きで、「日本では、福音書に十字架の印をしながら“(マルコ)による福音”と唱える」となっています(日本の教会における適応)。

2002年に出版された新しいラテン語規範版の総則では、司祭だけでなく会衆も“自分の額、口、胸に十字架のしるしをする”と修正されましたが、これに従う日本語版典礼書の改訂は、未だ教皇庁典礼秘跡省の認可を得るに至っていません。ですから今は、日本語版現行典礼書(1978年)掲載の総則に従ってミサが行われることが正しいのです(暫定版 総則 p.8 日本における適応 参照)。

福音が語られ聞かれることへの熱心ではなくて、不正確な知識による自己流の誤った動作への執着が、

なぜか10年ほど前からカトリック浜松教会の会衆の間には伝染してしまいました。しかし、キリストの福音に掛かっている覆いは取り除かれねばなりません。神の似姿であるキリストの栄光に関する福音の光が、ミサをささげる一同に見えるようになるために(IIコリ4:3-4)。

3. Iコリ

v.35 「……決してあなたがたを束縛するためではなく、」

どこの教会にも、心を一つにして教会に奉仕している素晴らしいご夫妻がおられますが、事実上ほとんどどの夫婦は良きにつけ悪きにつけ、お互いの足を引っ張り合っているものです(v.33-34)。だからと言って今日、独身の男女の方が“ひたすら主に仕える”のに好都合だというわけでもないでしょう。

「なすべきことはただ一つ、後ろのものを忘れ、前のものに全身を向けつつ、神がキリスト・イエスによって上へ召して、お与えになる賞を得るために、目標を目指してひたすら走ることです。……いずれにせよ、わたしたちは到達したところに基づいて進むべきです。」(フィリ3:13-16)

4. 申

v.15 「あなたの神、主はあなたの中から、あなたの同胞の中から、わたしのような預言者を立てられる。あなたたちは彼に聞き従わねばならない。」

主イエス・キリストは、この約束の完成者として遣わされました(使3:22-26)。彼は律法学者のような“律法の法的解釈者”ではなくて、“律法の完成者”(マタ5:17、ロマ10:4/フランシスコ会訳 訳注参照)として、信じるすべての者に義をもたらす「新しい教え」(διδαχὴ καινὴ マコ1:27)である福音を携えて来られました。

正しく“神のことばによって教えられ、主のからだの食卓において養われる”(典礼憲章48)ところに、カトリック教会は存在します。そして、「わたしたちは皆、顔の覆いを除かれて、鏡のように主の栄光を映し出しながら、栄光から栄光へと、主と同じ姿に造りかえられていきます。これは主の霊の働きによることです。」(IIコリ3:18) アーメン、ハレルヤ。